

53年間病気なしの人生②



顧問 戸塚 進也(81才)

私は①で人生の最も幸せなひとつである健康につき、53年間病気なしについて、総論を申しあげましたが、以下②ではその理由につき最も重要と思われる数点につき、お話しいたします。

先ずなんと申しまして私は父と母が産んでくれてこの世にあらわれましたが、この父母が健康に恵まれていたことが私の今日に完全に結びついている(遺伝?)と確信しております。

父も母も80歳を超すまで元気で暮らしておりました。ただし残念ながら双方の生活の在り方が、商人の父と肛門病の病院長の家の長女として何不自由なく育った母では、生活態度が異なっていたために、私が5歳の時で終戦近くに離婚となり、私は母方に引き取られ、祖父が空襲で亡くなるまでの間、祖父と祖母に可愛がられて何不自由なく暮らすことができました。

しかし、どなたも同じことですが、空襲ですべてを失い貧乏のどん底に落ち、母に連れられて東京に出て、進駐軍が日本の女性に産ませた子供達を預かる施設で、母親は栄養士として働き、私は親戚のお世話で町田市の広大な山の中にある玉川学園で、小学校5年から高等部卒業までお世話になり少年時代を送りました。塾生活では外米やうどん、パンの貧しい食事でしたが、規則正しい食生活を送ったことも健康のためには良かったと思っております。

そして日本のペスタロッチと尊敬された、全人教育で有名な小原国芳先生に尊い教養を頂き、学園内でアルバイトや小原園長の秘書のような仕事を中高校時代は経験させていただきました。そのころに母の弟である矢部晁作医師とめぐり逢い、当時慈恵会医科大学より赤坂の衆議院宿舎に派遣され、住み込んで医務室を担当して10年間ほど働かせて頂いた叔父に、学生時代から親代わりのよう

に大切にさせて頂いた懐かしい思い出を持っております。叔父は心臓の専門医でしたが、吉田首相の「バカヤロー解散」の際の乱闘国会の本会議場で傷を負った議員達を白衣で入って治療にあたったと、ほとんど例のない体験をした人でした。その後、郷里の浜松保健所の医師として働き、祖父の病院のあった地で内科医として93歳まで診療活動を行い、昨年天寿を全ういたしました。

私は今日までの病気の相談はこの叔父、矢部晁作博士に診察や投薬を願った結果1日も入院したり、病気で終日寝たことのない人生を送ることができたのです。「かかりつけ医」などの言葉は今は当然のように一般的な用語になっておりますが、人生を通じた一人の医師にあらゆる症状を話し、叔父も必要な検査をしたり専門医を紹介してくれることもありましたが、いずれも軽症で済ませることができました。私はもし再び生まれかわってこの世に生きて叔父に会った時に「進也、お前はこれでおしまいだよ」と言われれば「はい。ありがとうございます」と死を恐れずに申したと、今でも確信しております。皆様もすでにどんな時でもあらゆる病気に対して率直に相談できる主治医をお持ちになることが長寿の大切な要件と存じます。

ただし、最後にこれは絶対真似してはならないお話をいたします。それは定期健康診断は私は一度も受けておりません。何故かと申せば真に気が小さく、もし検診で「ここが悪いよ」と言われれば、その場でショックで死んでしまうのではないかと思うからでございます。小さい声で申し上げますが、人間必ず何処かは問題がありそれを見つけるのがお医者様ですからその検査結果を聞いただけで死にそうになるのなら、宣告されない方が幸せなのかなと思って人生を今日まで送ってまいりました。